



高井貞二

と文 あの日あの頃

青蛙房刊

書名 あの日あの日頃

著者 高井貞二

発行者 岡本經一

印刷 三協美術印刷株式会社

製本 株式会社関川製本所

用紙 王子製紙株式会社

表布 望月株式会社

製函 日の出紙器有限公司

発行 昭和54年12月20日

定価 二、三〇〇円

東京都文京区本郷二ノ七ノ九

発行所

有限会社

青

蛙

房

振替東京 九一七二三八四  
電話東京 (八一三) 一五九九七

0095—00373—3800

あの日あの頃

目次

読書と私……………五

初めて見た本	8	東京への憧れ	35
幼い頃	11	東京にて	38
小学生の頃	14	サンサンと日の輝く街	41
文化の新しい風潮	17	「新青年」と「モダン日本」	44
西中武吉先生のこと	20	消えていった雑誌たち	47
一つの試練	23	戦地にて	50
小説へのめざめ	26	徳島のある日	53
外国の香り	29	戦後の荒廃のなかで	56
本を愛する	32	読書と私	59

堺大浜水上飛行場……………三

なくなつた海岸	64	犠牲者たち	79
伯父の創業	67	夏休みの楽しみ	82
揺籃期の飛行機	70	平穏な日々	85
順調な発展	73	伯父の充実した頃	88
当時の飛行描写	76	追いうちの悲しみ	91

千島に消ゆ 94

不屈の魂 97

映画と流行歌 ..... 101

初めて見た映画 102

ロケーション 105

阪妻のこと 107

若くして国に殉じた友 111

外国からの映画 114

映画界での昔の友達 117

ひたむきに描いた日々 120

ニューヨークにて 123

女の子たち 126

リンカーン・センター 129

昔の唄・古い歌 132

演歌師のこと 135

美しい愛ちゃん 138

カフェーの頃 141

流行歌の発生 144

ラジオの出現 147

酒は涙か溜息か 150

別れのブルースの頃 153

従軍のころ 156

戦後そしてニューヨークへ 159

相撲とり ..... 一六四

東京から来た巡業力士 164

双葉山の時代 167

すばらしきハワイ 170

レスラーになる東富士 173

江利チエミを出迎える 176

ある夜の出来事 179

レスリングの試合 182

東富士の初試合 185

## 犬、鳥、猫

黒いむく犬 190

白い犬 193

ガチャというアヒル 196

ガチャとメリーの死 199

鳥の楽園 202

小鳥いろいろ 205

燈台行 208

いとしのタマ 211

帰って来た白い猫 214

.....二八九

## モデル

モデル今昔 218

初めてのモデル写生 221

乳首の蠅 224

宮崎モデル周旋所 227

彫刻モデル台 230

濡れた黒いパンティ 233

ベテランのモデル 236

ニューヨークのモデル 239

.....二七

## センチメンタル・スケッチ

人力車について 244

市電について 247

.....二四三

自動車のこと 250  
汽車の思い出 253

キュービーについて 256  
夏の風物詩とお菓子 258

## アメリカの女子大学

.....二五

南部への旅 260  
デル・チムト氏と共に 263  
大学でのインタビュ― 266  
美術部長宅で 269  
コロンビア美術館にて 272  
授業始まる 275  
学生との親和感 278  
友人たち 281  
バス旅行 284  
コロンビアの街にて 287

ロックヒルで 290  
ジャンクショップ 293  
古い一枚の写真 296  
日米の新聞社へ 299  
スキヤキ・パーティー 302  
授業の日々 305  
卒業する彼女たち 308  
ニューヨークに帰る 311  
再び大学へ 314  
私の展覧会 317

あとがき.....三〇





## 読書と私

幼い私には難解だが、何とか判りたい、と二度も三度も読み返した本もあったし、読みすむむにしたがって、残りのページが少なくなり、どうして未だ未だ続かないのかと残念がったりした面白い読みものも、いくつあった。

夜の更けるのも知らず夢中になつて読んだ本、毎月送られてくる全集本が、一冊一冊多く並んでゆく楽しみ、読書から、いろいろの楽しみを味わうことが出来たし、たくさんのことを教わつたと思う。

## 初めて見た本

外国で長いこと暮らしていると、ときどき、とても日本が恋しく、昔の思い出が、はっきりと一種のせつなさとともに浮かんでくるのがよくあった。そうしたこともを、あれこれ書きつづって一冊のノートが埋まった。今、そのノートをひろげて、まず私と書物といったことから書いてみたいと思う。

今の日本は出版物の洪水といえるだろう。全体からみると、私の住んでいたアメリカよりも、年間、より多くの本が刻々生産されているのではないだろうか。いずれにしてもまあ世界でも一、二を争う旺盛さ<sup>せうせい</sup>だろう。都会の地下鉄や国電に乗ってみると、乗客の半分は週刊誌や新聞、文庫本をひろげて読みふけているし、駅やプラットホームの売店には、いろいろ種類の多い週刊誌が、うず高く積み上げられ、次ぎ次ぎと買われている。

アメリカでも“ニューズウィーク”“タイム”等々の週刊誌が何百万と発行部数を競っているが、それらの内容記事はまじめな世界情勢の紹介であり、経済動向、政治交流の解説、評論などで、日本のように、芸能界の誰が誰とどうした、ということがさも重大なように書き立てられる興味本位さとは大きなへだたりがあるようだ。そして、発売されても書店に積み上げられることもなく、販売方法は主に直接購読者に送られる通信販売で、いわゆるブックストア（本屋）では売られていない。売っている所というのは、街の新聞スタンドや煙草屋の店先きなどに並べられ、派手な表紙が並んでいる日本の書店を見なれている私たちには、ちょっと奇異



な感じがする。もちろん、日本のように、アメリカやヨーロッパの有名な芸能人のゴシップや、人々の弱点につけ入って、くすぐるような興味本位の新聞、週刊誌がアメリカにもない訳ではないが、それらは発売されても長続きせず、いつの間にか消えていってはまた新しいのが出てくる、といったふうで、パッと評判になるものもないし、発刊ごとに新聞に記事内容を並べた大きな広告が載るといふこともないようだ。

毎朝毎夕の新聞も、そうした店に積み上げて売っていて、各戸に配達ということはない。新聞社に申し込むと、配達をしてくれない

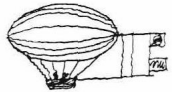
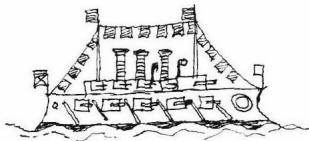
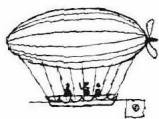
ことはないが、そのときは新聞代以外に配達料金も支払わねばならない。まあ長い習慣で、人々は朝の散歩兼ねて店に向いてタイムスやデーリーニュースを自分で買いに行く。これもアメリカ生活の朝の楽しみの一つだ。日本は、世界でもトップの大量の読者層をもつ国だ、といっても、その読む内容がどうかと思うのだが、いずれにしても活字に親しむ人が多いことは、たとえ興味本位だとしても時代の様子もわかることだし、ひいては世界のコミュニケーションの中にやはり関連していることになるだろう。

私が生まれて以来、一番最初に印象に残っている本は何だったか、と考えてみた。それは多分、私が三、四歳の頃、大正の始めの頃だったようだ。大小たくさんの満艦飾軍艦が海に浮かび、空には気球、飛行船がいっぱい浮かんでいる絵本が思い出される。日本にとって大事件だった日清、日露戦争の名残りだろうか、どのページもいちように変わりばえのしない軍艦の絵がらであったような気がする。どの軍艦の胴体にも斜めに棒のようなものが並んでいて、舳（さき）はいずれも吃水線のところで先きに出っばり尖（とが）っている。これは、敵の軍艦に体あたりで突進して、その胴体に穴をあけるためだと教えられた。日本画家が描いたのだろう、浮世絵の流れをくむ錦絵風で、どの絵の空も水平線が赤く、上にいくに従ってぼかされて青が濃くなってゆく描きかたで、今思うと多分に骨董的価値が十分あるような古風さだった。発行所は、たしか大阪の榎本なんとか堂ということ覚えてる。

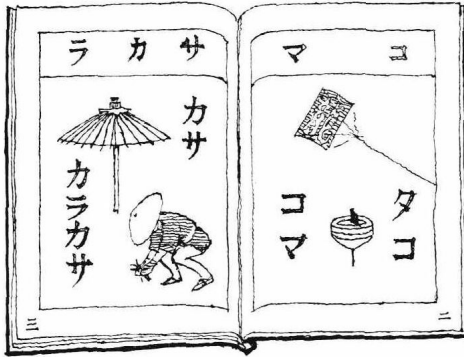
## 幼い頃

絵本につづいては、小学校一年生のときの教科書ということになる。私は、神戸市立諏訪山小学校に七歳で入学した。その時の読本は、濃いネズミ色の表紙で、第一頁は、日の丸の国旗が斜めに大きく描かれて、その下に「ハタ」と片仮名が入っていて、タコ、コマ、マス、ミノ、カサ、カラカサ、スズメガイマス・カラスガイマス・トリガイマイマス……とつづいていく。大正六年だった。ミノ、カサ（スゲガサ）、カラカサ、などといかにも時代をしのばせる。かばんの中にはノートブックでなく、石版いしばんとローセキを入れていったものだった。（翌年から教科書が改訂されて、サイタ、サイタ、サクラガサイタから始まることになる）

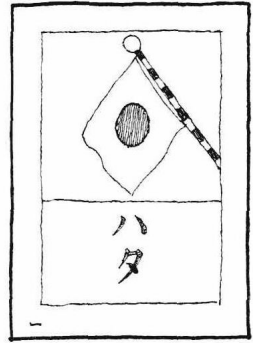
神戸加納町の電車道に小さな本屋があって、私は「幼年の友」姉は「幼女の友」という絵本が毎月出るのを待ちかねて買って貰った。いずれも十頁あまりの薄いが多色刷りで美しく、毎号、見開きで、大掃除の絵とか街の鳥瞰図の細密画がきまって載っていて、そこが一番魅力的で、あかずながめていた。ある号に「狐の嫁入り」がそのページにのっていて、花嫁衣裳に角かくしの狐のよめさんがカゴに乗り、それを中心にして大行列が家々の間の辻々を曲がって進んで行く絵を、今ハッキリ思い出すことが出来る。関西では、太陽が照っているのに、小雨が降るのを「狐の嫁入り」と子供の時聞いたが、そんな時ごとに、この絵が浮かんできたものだった。この頃、大阪の道頓堀にあった本屋で「良友」（時事新報社発行）という雑誌を買ってもらったし、「飛行少年」「譚海」というのもあった。谷洗馬せんばという画家の、荒いタッチで馬が走っている絵が印象深く思い出



エホンの絵



小學一年讀本



ハタカ

される。

小学校三年の時、北野町から神戸近郊の西代という町に引っ越したが、そこに建っている家並みのすべてが新しく、活気に溢れた新興の街、といったふうで、本屋が一軒開店した。小さな店だが、初めて本屋と呼べる今日の書店の私たちをしたもので、棚に背を向けた本が並び、ウインドーには新刊書が飾られていて、この店の前を通るごとに、何か新鮮な匂い、楽しい光りに包まれているようで、心の高まりを覚えたものだった。この頃、友達と車庫に電車をスケッチに行ったり、近所ののり屋の息子が、東京の美術学校に入学す

るといふ祝賀宴をのぞいたりして、何とか私も画家になりたいと、子供心に漠然と思うようになっていった。小学校四年の時、和歌山県伊都郡の高野口小学校に転校した。高野山こうやまのふもとの小さな町で、ここでは「三平」と、学用品と雑誌だけ並べて、その上を金網でカバーして、手にとれないようにしてある意地のわるい小さな本屋と、二軒が出版物を扱っていた。「三平」のウインドーに、岡本一平が朝日新聞に連載していた当時の内閣の閣僚、若槻礼次郎、加藤高明、浜口雄幸といった人々の似顔絵を切り抜いて陳列してあったのを思い出す。この頃は、雑誌の種類も多くなっていて、新年号はまだかまだか、と毎日聞きにいったものだった。待ちに待ったそれらが到着して、付録の「すごろく」を拡げて見るよろこび、子供の頃の最大のものだったような気がする。

母の話によると、明治の末期、渡辺霞亭かていという小説家が「渦巻」という小説を新聞に連載して大評判になり、当時の着物衣装に渦巻き模様が大流行したということで、その頃、新小説というのが流行し、「己が罪」「乳姉妹」「はととぎす」等が貸本屋を通じて随分読まれたらしく、いずれも悲しい哀れな筋が歓迎されたようである。「継子いじめ」などは好個のテーマだったようだ。義理人情のしがらみ、というのが当時の庶民の慰みになり、生活に密着したもので、それらを読んで、あわれさに涙を流すのが嬉しかったのである。しかし、一方では、夏目漱石や森鷗外、幸田露伴などという人々による新鮮な仕事で近代文学の礎が築かれつつあった。



## 小学生の頃

子供の間に、全国に風靡した立川文庫が現われたのはこの頃だったろうか。「真田十勇士」「猿飛佐助」「霧隠才藏」「戸田白雲斎」「塙団右衛門」等々、超小型で紙クロスの表紙、色は主に濃紺のが多かったが、赤いのも緑色のもあった。金文字の刻印で書名が光り、粗雑な紙に小さな活字のベタ組みで、全部ルビがふってあり、いたって読みにくい。内容はいずれも豊臣の遺臣が活躍するのが大部分で、徳川方はいずれも悪玉にされ、主人公は武者修業中、どんな豪傑、忍者に逢って闘っても絶対に負けることはない。いつもさっそうと、カンラカラカラと笑って、その強いこと、それが子供たちの魂をゆさぶったのだろうか、真田幸村が隠れ住んでいた九度山は高野口の隣り町なので、読みながら親しみがわいたものだった。友達のかなに、この文庫本を集めているのがいて、次ぎから次ぎへと借りて、ひとときはむさぼるように読んだものだ。しかし、何冊も読んでいるうちに、どの話も結局同じような平板さで、しまいにあきてしまつて、これからは影響も受けず、印象にもあまり残っていない。

その頃、「略画の描き方」という本が手に入った。田舎の小さな駅、シグナル、踏線橋、バラソルをさした着物の娘、瀬戸内海の小さな漁港、燈台、漁師町、水郷風景、といった大正の匂いに満ちた画題が単純化され要約された線画で、しかも不思議に現実感にあふれ、一ページのなかにいくつも描かれている。竹久夢二ふうな、ふくよかでどこか心がくすぐられる悲しいような温かさのタッチがとても魅力的だった。誰が描いたのか、